

## 【研修参加学生の報告書から】国際協力農業体験講座特論

・この研修を通じてわかったことの1つ目は、物事を判断する際には、ものの定義や基準をどこに置くかによって、見え方が異なるということである。私たちが目にしたミャンマー式の食肉処理法は、家畜をと殺して肉にするという点では日本と同じだったものの、屠畜が野外で行われることや普段着でサンダル姿の数人によりたった数本のナイフで捌かれていくことなど、プロセスが大きく異なっていた。この場合、ミャンマーの食肉処理法は衛生的でないといえるかもしれないが、ミャンマーに滞在している間、肉を毎日口にして美味しいと思ったし、それでお腹を壊すこともなかった。よく考えてみると、「日本の当たり前」が一番正しいのだろうかと思えてきた。同じ型に当てはめる必要はないのだと身をもって認識した。2つ目は、ミャンマーで研修をする中で、農業に関することと言えば地域によっては化学肥料を大量に使用していること、水質汚染やごみの投棄など、いくつかの問題に触れた。それについて私は「それって良くない」と指摘することは簡単であるが、これまでに日本で長年生活をしてきて、果たして日本も同様に環境問題を抱えている現状をどれだけ理解しているのだろうかと感じた。外に目を向けることも必要だが、まずは「日本は怎なの？」と自分に問いかけるようにしたいと思った。3つ目に、国際協力とは「何か支援をする」という行為そのものではなく、支援後に支援を受けた国が自立できるようにすることが目的だと分かった。また、支援する側・支援される側の両者が知恵を出し合い、知識を共有し、ともに学び合いながら進んでいくことが国際協力の在り方なのだを知った。一方的な考えによってではなく、文化やルールの異なる地域に暮らす人々に寄り添う形で行われるべきことなのだと学んだ。

(農林水産学研究科・修士1年)

### ▼集合写真



### ▼市場見学

